

布の力・暖簾考

滋賀県東近江市五個荘 外村宇兵衛邸での勉強会にて



大阪市 雑貨店 新しい形の暖簾

日本独自に発達した暖簾は「結界の美」と言われる。ルーツは縄文時代に風を避けるために入出口に掛けた菴（むしろ）だともいわれる暖簾。形は源氏物語絵巻に多く描かれ今も神社などで見られる几帳や幌（とばり）が原型とされ既に平安時代には民家の戸口に掛けていたらしい。信貴山縁起絵巻(1180年頃には)絞り染らしい半暖簾も描かれている。暖簾という名称は室町中期の文献(節用集など)に出てくるが禅寺では簾の事を涼簾、寒期には簾に布を張って暖簾(中国・元から伝わり、ナンレン・ノンレン・ノウレン・のれんと発音が変化)と呼んでいた。江戸時代に入るまでは麻の生産が一般的だったので、苧麻(からむし)の垂れ布の意から、既に生活に定着していた布製のそれを「垂れ蒸し」と呼んでいたが、次第に暖簾(のれん)となる。

鎌倉期の武士の台頭とともに旗印などが発達し、同時に商家でも紋、商標を染め抜いた暖簾が現れ室町時代には多用されるようになる。そして江戸の寺子屋による識字率の向上に伴い文字が描かれた暖簾が出てくる。日本橋の呉服商、越後屋三井八郎右衛門が「現金安売掛値なし」と大きな商標とともに染め抜き、周囲が皆真似をしたことから益々生活具としての暖簾としてだけでなく、しだいに商いのシンボルとして老舗性や信用性の象徴として活躍する事になる。

古来から見られる暖簾の種類は多いが、標準の大きさは丈が鯨尺で3尺・約113cm、横幅は三幅で約105cmであり数百年の間ほぼ変わっていない。長暖簾は丈が約160cmで呉服商などが多く、日除けと共に客も落ち着いて品選びが出来る。半暖簾は丈が約40cmで作業や品揃えを見やすくしている。軒下に間口一杯に昼夜掛けっぱなしにする水引暖簾や1枚もので裾に重りをつける太鼓暖簾、家の中で使う潜り暖簾、床暖簾、髪結いには派手な絵柄の絵暖簾、歴史は古く勝手口や通路にも多用された縄暖簾、鼻員に送る花暖簾、ガラスや木の珠を連ねた珠暖簾など多様である。金沢を中心に嫁入り時に持参する花嫁暖簾は豪華にめでたい図柄が友禅などで染められ、現在は七尾地方で町おこしとして5月に展示されている。そのほかに丸竹や木の丸太を連ねたものもある。かつては色による商いの区別もあった。藍、紺は呉服商、白地は菓子・薬商、柿色は格の高い太夫の居る店だけに。浅葱はもっぱら遊所で、紫は禁色。但し現代は職業に関係無く、赤、黄、紫と多様である。